

大学生の問題行動防止を目的とした 動画制作と授業実践

西本 佳代（大学教育基盤センター講師）
大久保智生（教育学部准教授）

1. はじめに

香川大学では、平成23年度より「市民としての責任感と倫理観」の育成を目的とした全学共通科目主題A「人生とキャリア」が必修化されている。その到達目標は、「社会において自己が果たすべき役割や、市民としての責任ある行動について理解を深め、そこから自己や社会の未来について考えることができる」とされる。主題Aの新設をはじめとした当時の全学共通教育カリキュラムの改編の背景には、中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』に記載された「21世紀型市民」にふさわしい「学士力」の考え方があった（武重ほか、2011）。すなわち、「知識基盤社会」の到来を前提とし、「専攻分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材」（『我が国の高等教育の将来像』）である「21世紀型市民」の育成を掲げ、行われたカリキュラム改革だったといえる。

他方、実際の運用にあたっては、異なる側面からも効果が期待されるようになる。不祥事対策としての主題Aの活用である。藤本（2015）が指摘するように、2000年以降、大学生の不祥事が社会問題として取り沙汰されるようになり、本学でも主題Aにおいて学生の社会的責任や倫理観の育成が求められるようになった。

確かに、香川大学生が不祥事を起こしたのであれば、その対応策が大学に求められるのは理解できるし、それを授業で行うのであれば、全学必修科目である主題Aが妥当なのだろう。しかし、主題Aで扱われる「市民としての責任感と倫理観」の育成は、単に「～してはいけない」という規範意識を伝えるだけの授業になってはならないはずである。大久保（2011）が指摘するように、規範意識がないから問題行動を起こすわけではなく、それらは分けて考える必要がある。また、現在の道徳教育が、教員の想定している“答え”をあてるゲームになっているという指摘（松下、2011）もあり、そうしたゲームを続けてきた学生たちに規範意識を教えても、表面的に対処される可能性が高い。そうではなく、主題Aが新設された当初の理念に沿って、あくまで“シティズンシップ教育”¹⁾を目指した授業の一環として、学生の不祥事を扱うべきではなかろうか。

こうした考えを持ちながら、第一筆者が主題Aの授業を担当していたところ、香川大学生の問題行動防止を目的とした動画制作の協力依頼があった²⁾。入学式において新入生に

視聴してもらうことを目的とした15分程度の動画が必要なのだという。そこで、動画制作の目的を大きく二つに設定し、依頼を引き受けることにした。すなわち、①身近な問題行動によって大学生活を台無しにしないよう伝える事、②問題行動を起こす友人との関係を考える必要性を伝える事、の二点である。①は、不祥事対策を念頭に掲げた目的である。何が問題行動に該当し、それをすればどうなるのかを具体的に伝えることを目指した。一方の②は、“シティズンシップ教育”を念頭に掲げた目的である。友人が問題行動を起こすと仮定したときにどのように関わるのかを考えてもらうことを目指した。それぞれ、①は入学式での動画視聴で、②は動画を教材とした90分の授業で学生に伝えることを想定した。本稿では、この二つの目的に従って制作した動画とそれを用いた授業実践について報告し、動画に対する評価を検討する。以下では、制作した動画の内容と企画意図（第二節）を述べ、動画視聴者を対象として実施したアンケートの調査目的（第三節）、調査方法（第四節）、調査結果（第五節）について説明した後、動画を用いて行った授業実践（第六節）を紹介し、全体を通じた考察（第七節）を行う。

2. 動画の内容と企画意図

制作した動画「香川大学物語」は、主人公タダシとその幼なじみのナツミを中心とした話である³⁾。大学に入学した直後、タダシは先輩から新入生歓迎コンパに誘われる。二つ返事で参加を決め、居酒屋で騒ぐタダシに対し、同席したナツミは周囲の客が迷惑していることを気にしている。そのうち、先輩につがれるがままにお酒を飲み続けるタダシに呆れ、ナツミは一人で先に居酒屋を出る。居酒屋に残されたタダシは、ナツミのことが気になり追いかけるが、居酒屋の外にナツミの姿は見えない。ちょうど、目の前には鍵のさかつたままの自転車が置いてある。そこでタダシは自転車を“借りて”、ナツミを探すこととする。ナツミからの返事を確認するため、スマートフォンを見ながらタダシが自転車を運転していると、突然目の前に高齢の女性があらわれる。自転車との接触により高齢の女性が倒れ、騒ぎになっていると、そこに偶然警察が通りかかる。未成年での飲酒、自転車による飲酒運転での人身事故でタダシは簡易裁判所に行くことになる。後日、タダシの無期停学が決まり、大学の掲示板に張り出される。また、タダシが参加した新入生歓迎コンパの写真がSNS上にアップされ、未成年飲酒が明らかとなり、サークルは活動停止となる。こうした状況に対してナツミは「どうしてあの時、止めなかったのか」と後悔する。一方のタダシは、自分の事件が報道された新聞記事を見つめ、泣きながら反省の弁を述べる。そこで、「ほんの少しだら、と思った行動が、取り返しのつかないことになる。」とナツミのナレーションが入る。

物語の大筋としては、以上の通りだが、入学式での上映にふさわしいものとなるよう、物語の後に、充実した大学生活を過ごした先輩のインタビューが続き、新入生へのメッセージが紹介される。また、図書館や授業風景を背景に、「目標をもって行動しつづければ、夢

がかなう」等のポジティブなメッセージも伝えられるほか、金融機関の利用や宗教の勧誘についての注意喚起も行われている。

この物語の構成を考えるにあたり、次の三点に留意した。第一に、学生が身近に感じられる題材にするということである。せっかく動画を制作したとしても、その内容が学生にとって身近に感じられないものであれば、いつまでたっても犯罪は自分以外の誰かの問題である。そこで、動画制作にあたり、香川大学1年生の問題行動の実態について調査を行った（大久保・西本、2016）。その結果、未成年飲酒や飲酒後に自転車に乗るといった飲酒関係の問題行動を経験したことのある者が半数程度いること、他人の悪口などをSNSにあげる、他人の自転車を黙って使うといった問題行動を香川大学において見聞きしたことのある者が約3割にのぼることが明らかになった。そこで、これらの要素、すなわち、未成年飲酒、飲酒後の自転車運転、自転車の無断借用、SNSの間違った利用、を核として、台本の制作を依頼した⁴⁾。

第二に、友人が抑止できる事柄として問題行動を扱うということである。問題行動を扱う動画の多くは、「～してはいけない」、「～するとこんな大変なことになる」という問題行動を起こす当事者を対象とした注意喚起に留まりがちであった。しかし、飲酒後の自転車運転等の軽犯罪であっても約半数の香川大学1年生は経験がないし、重篤な犯罪についてはほとんど関与していない（大久保・西本2016）。そのため、問題行動を起こす当事者というよりは、むしろその傍にいる友人の一人として何ができるのかを考えられる構成にした。具体的には、主人公の幼なじみであるナツミを登場させ、ナレーションを入れることにより、友人が抑止できた事柄として主人公の事件を扱った。

第三に、結論を描かないということである。動画の最後、主人公は自分の事件が報道された新聞記事を見つめ、泣きながら反省の弁を述べるが、その後のことは描かれていない。これは後述するように、「自分のかかわり方が主人公のその後を変える」というメッセージを授業で伝えるためである。不祥事対策を主眼とすれば、「問題行動を起こせば大学から排除されます。だから問題行動を起こしてはいけません。」というメッセージを伝えれば十分なのだろうが、大学から排除されても当事者たちは「社会」に存在する。大学でこの内容を扱うならば、罪を犯した人も含め、「社会」の在り方を考えるべきだと思い、動画の最後はあえて結論を描かないことにした。

3. 調査目的

以上の三点に留意して構成した動画「香川大学物語」であるが、筆者らの企画意図通りに視聴されているとは限らない。特に、授業のように補足説明の機会がなく、動画の上映だけに限定される入学式では、新入生に何の印象も与えていないことすら予想される。そこで、動画を視聴した1年生を対象に、アンケート調査を行うことにした。アンケートでは、①動画の印象、②問題行動に関する理解、について聞いていた。これらの結果をもとに、

まずは制作した動画の効果検証を行う。加えて、動画の上映だけでは学生の理解が不十分な点をみつけ、授業で補足説明を行う際の参考にした。

4. 調査方法

4-1. 調査協力者と手続き

アンケート調査は、全学共通科目主題A「キャンパスライフ入門」を受講した89名を対象とした。授業の一環として動画を視聴してもらい、その後にアンケートに記入してもらった。性別は、男性51名(57.3%)、女性38名(42.7%)となっており、学年は、1年生88名(98.9%)、2年生1名(1.1%)である。学部の内訳は、教育学部6名(6.7%)、法学部5名(5.6%)、経済学部8名(9.0%)、医学部10名(11.2%)、工学部39名(43.8%)、農学部21名(23.6%)である。なお、調査協力者に対しては、アンケート用紙への記入と授業の成績とは関係がないこと、協力を望まない場合は協力しなくてもよいこと、集計後のアンケート用紙はシュレッダーにかけられ外部に回答が漏れないことを伝え、倫理面への配慮を行った。

4-2. 質問紙の構成

(1) 動画の印象

動画の印象については、大久保他(2012)や時岡他(2013)の調査を参考に、「良いと思った」「勉強になった」「大学生の問題行動への関心が高まった」「今後の生活に生かせると思った」の4項目を用いた。各項目に対して、「1:全くあてはまらない」から「5:非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

(2) 問題行動に関する理解

問題行動に関する理解については、大久保・西本(2016)の調査を参考に、動画の内容と企画意図を踏まえ、「動画で起きたようなことが自分の身に起きる可能性もあると思った」、「問題を起こすと周りの人たちに大きな迷惑をかけることが理解できた」、「問題を起こすと自分のやりたいことができなくなることが理解できた」、「未成年でお酒を飲む、もしくは未成年者にお酒を飲ませると大変なことになることがよくわかった」、「お酒を飲んで自転車に乗ると大変なことになることがよくわかった」、「他人の自転車を黙って使うと大変なことになることがよくわかった」、「問題行動をツイッターやフェイスブックなどのSNS上にのせると大変なことになることがよくわかった」の7項目を用いた。各項目に対して、「1:全くあてはまらない」から「5:非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

5. 調査結果

5-1. 動画の印象

まず、動画の印象について確認したい。表1は、動画の印象を尋ねる4項目の記述統計量を示したものである。この結果からは、「良いと思った」、「勉強になった」の平均値が4

を超えており、「そう思った」もしくは「とてもそう思った」と回答した肯定的な回答者の割合も85%を超えてることがわかる。「大学生の問題行動への関心が高まった」、「今後の生活に生かせると思った」については、平均値が4を超えていないものの、それぞれ3.97、3.94と、4に近い値を示している。また、「そう思った」もしくは「とてもそう思った」と回答した肯定的な回答者の割合もいずれも80%を超えている。

表1 動画の印象の記述統計量

	全くそう思 わなかつた	そう思わな かつた	どちらとも いえない	そう思つた	とてもそ う思つた	Mean	SD
良いと思った	3 (3.37)	2 (2.25)	7 (7.87)	56 (62.92)	21 (23.60)	4.01	0.85
勉強になった	1 (1.12)	1 (1.12)	7 (7.87)	57 (64.04)	23 (25.84)	4.12	0.69
大学生の問題行動への関心が高まった	2 (2.25)	2 (2.25)	13 (14.61)	52 (58.43)	20 (22.47)	3.97	0.82
今後の生活に生かせると思った	2 (2.25)	2 (2.25)	13 (14.61)	54 (60.67)	18 (20.22)	3.94	0.80

注：() 内はパーセント。以下、同様に表記。

5-2. 問題行動に関する理解

次に、問題行動に関する理解についてもみてみよう。表2は、問題行動に関する理解を尋ねる7項目の記述統計量を示したものである。この結果からは、「動画で起きたようなことが自分の身に起きる可能性もあると思った」以外の5項目について、平均値が4を超

表2 問題行動に関する理解の記述統計量

	全くそう思 わなかつた	そう思わな かつた	どちらとも いえない	そう思つた	とてもそ う思つた	Mean	SD
動画で起きたようなことが自分の身に 起きる可能性もあると思った	5 (5.6)	4 (4.5)	11 (12.4)	46 (51.7)	23 (25.8)	3.88	1.03
問題を起こすと周りの人たちに大きな 迷惑をかけることが理解できた	1 (1.1)	0 (0.0)	4 (4.5)	35 (39.8)	48 (54.5)	4.47	0.69
問題を起こすと自分のやりたいことが できなくなることが理解できた	1 (1.1)	0 (0.0)	7 (7.9)	36 (40.4)	45 (50.6)	4.39	0.73
未成年でお酒を飲む、もしくは未成年 者にお酒を飲ませると大変なことにな ることがよくわかった	1 (1.1)	0 (0.0)	3 (3.4)	41 (46.1)	44 (49.4)	4.43	0.67
お酒を飲んで自転車に乗ると大変なこ とになることがよくわかった	3 (3.4)	0 (0.0)	2 (2.2)	44 (49.4)	40 (44.9)	4.33	0.82
他人の自転車を黙って使うと大変なこ とになることがよくわかった	1 (1.1)	1 (1.1)	6 (6.7)	47 (52.8)	34 (38.2)	4.26	0.73
問題行動をツイッターやフェイスブック などのSNS上にのせると大変なこと になることがよくわかった	1 (1.1)	0 (0.0)	6 (6.7)	40 (44.9)	42 (47.2)	4.37	0.71

えていることがわかる。これらの項目はいずれも、「そう思った」もしくは「とてもそう思った」と回答した肯定的な回答者の割合が90%を超えており、特に、肯定的な回答者の割合が高いのは、「未成年でお酒を飲む、もしくは未成年者にお酒を飲ませると大変なことになることがよくわかった」であり、95%を超えており、他方、「動画で起きたようなことが自分の身に起きる可能性もあると思った」は他の項目に比べると肯定的な回答者の割合が低く、77%にとどまっている。

5-3. 動画の印象と問題行動に関する理解の関連

さらに、動画の印象と問題行動に関する理解の関連についてもみてみよう。表3は、動画の印象を尋ねる4項目と問題行動に関する理解を尋ねる6項目について、ピアソンの相関係数を示したものである。その結果、すべての項目間で、有意な正の関連がみられた。動画に対して肯定的な印象を持っている学生ほど、問題行動に対してよく理解しているということができるだろう。

表3 動画の印象と問題行動に関する理解との相関係数

	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	
I 良いと思った		.583**	.411**	.369**	.431**	.361**	.433**	.391**	.289**	.271*	.388**
II 勉強になった			.593**	.609**	.342**	.564**	.534**	.597**	.330**	.478**	.485**
III 大学生の問題行動への関心が高まった				.741**	.264*	.526**	.591**	.419**	.422**	.547**	.547**
IV 今後の生活に生かせると思った					.321**	.514**	.579**	.403**	.372**	.509**	.454**
V 動画で起きたようなことが自分の身に起きる可能性もあると思った						.369**	.291**	.356**	.383**	.224*	.356**
VI 問題を起こすと周りの人たちに大きな迷惑をかけることが理解できた							.694**	.708**	.780**	.683**	.664**
VII 問題を起こすと自分のやりたいことができなくなることが理解できた								.716**	.596**	.572**	.696**
VIII 未成年でお酒を飲む、もしくは未成年者にお酒を飲ませると大変なことになることがよくわかった									.650**	.698**	.685**
IX お酒を飲んで自転車に乗ると大変なことになることがよくわかった									.746**	.760**	
X 他人の自転車を黙って使うと大変なことになることがよくわかった										.751**	
XI 問題行動をツイッターやフェイスブックなどのSNS上にのせると大変なことになることがよくわかった											

注：*p<.05, **p < .01

以上、動画「香川大学物語」を視聴した後に実施したアンケート調査の結果からは、概して、動画に対して肯定的な印象を持つ学生が多いこと、問題行動について理解している学生が多いことが明らかになった。また、動画に対して肯定的な印象を持っている学生ほど、問題行動に対してよく理解している傾向にあることもうかがえた。

では、このように評価される動画を用いて、どのような授業実践が考えられるのか。続

く第六節では、第一筆者が平成29年度に担当した主題A「キャンパスライフ入門」での実践を紹介する。

6. 授業実践

6-1. 授業の構成

主題A「キャンパスライフ入門」（クオータ型科目、8回完結）の第3回で「市民としての責任感と倫理観②一身近な犯罪ー」と題して授業を行った。構成は表4の通りである。

(1) 授業の目的を説明

授業を始めるにあたり、第3回の授業の目的を説明した。主題Aは、共通教育スタンダードの「市民としての責任感と倫理観」に対応し、「21世紀に生きる市民はどのように生きるべきか、また生きているのかについて学んでいくとともに、高校から大学、さらに社会へと出ていく学生が、市民としてこれからより充実した人生を歩み、キャリアを積んでいくための手助けとなる授業群」と位置づけられている。本授業では、法に触れる行為を題材として、「21世紀市民の生き方」を考えることを伝える。

(2) 大学生による犯罪、身近なルール違反の現状について説明

近年、報道されている大学生による犯罪について触れた後、香川大学1年生を対象として実施した問題行動の実態に関するアンケート調査の結果（大久保・西本、2016）について説明する。その中で、つい行ってしまう身近なルール違反や、剽窃等の知らないうちに行ってしまうルール違反などについて伝える。

(3) 動画の視聴

動画を視聴した後、主人公がどのようになったのか各自で予想してもらうことを伝えた上で、「香川大学物語」を視聴してもらう。

(4) アンケートの記入

動画を視聴した上で、動画の印象、問題行動に関する理解について、アンケートに回答してもらう。

(5) グループワーク「タダシくんはどうなった？」

まず、問題を起こした後に主人公がどうなったのか、各自でワークシートに記入してもらう。その後、グループで意見を共有し、全体に向けて発表してもらう。

(6) 解説

「予言の自己成就」等の社会学の理論を用いながら、一人ひとりの反応が「社会」をつくっていること、ワークシートの回答は自分の「社会」の見方を示していること等を伝える。また、近年、「排除型社会」へ移行していると指摘されており、その中で「モラル・パニック」を起こさず冷静な行動が求められることを説明する。

(7) ミニレポートの記入

「21世紀に生きる市民はどのように生きるべきか、また自分自身はどのように生きたいのか」、授業を通して考えたことをまとめてもらう。

表4 授業の構成

項目	内容
①授業の目的を説明（5分）	「市民としての責任感と倫理観の育成」という主題Aの主目的に応じて、本授業がつくられていることを説明する。
②大学生による犯罪、身近なルール違反の現状について説明（15分）	近年報じられている大学生による犯罪、香川大学生を対象としたアンケート調査の結果をもとにした身近なルール違反の現状について説明する。
③動画の視聴（12分）	「香川大学物語」を視聴してもらう。
④アンケートの記入（8分）	動画に関するアンケートを各自で記入してもらう。
⑤グループワーク「タダシくんはどうなった？」（20分）	ワークシートをもとに、問題を起こした後に主人公がどうなったのか、各自で予想してもらう。各自で予想した後、グループで意見を共有してもらい、全体に向けて発表してもらう。
⑥解説（15分）	「予言の自己成就」等の社会学の理論を用いながら、一人ひとりの反応が「社会」をつくっていること、ワークシートの回答は自分の「社会」の見方を示していること等を伝える。
⑦ミニレポートの記入（15分）	「21世紀に生きる市民はどのように生きるべきか、また自分自身はどのように生きたいのか」、授業を通して考えたことをまとめもらう。

6-2. 授業のミニレポート

第3回の授業では、最後にミニレポートを書いて提出してもらった。テーマは、「21世紀に生きる市民はどのように生きるべきか、また自分自身はどのように生きたいのか」、授業を通して考えたことをまとめる、という抽象的な内容であり、一人ひとりが記載する意見は大きく異なっている。第4回の授業の冒頭では、それらの意見をいくつか紹介し、授業担当者の解釈を加え、振り返りを行った。次に代表的なものを三つ紹介する。

- ①私はどんなに注意したとしてもミスをするような人間だと理解しているので、現代のレッテルにより人を判断する社会で不利にならないように、ミスのリカバー、ミスが起こる可能性の排除をがんばっていきたい。
- ②排除型社会は怖いなと思ったけど、正直自分も無意識に「排除的な考え方」になっているのではと思いました。たとえばもし隣に昔犯罪をした人が引っ越して来たら、本人が更生していたとしても怖い人だと思い込んで多分避けます。
- ③排除型社会になっている今では、少しでも他者と手をつなぎ排除される人を減らしていくように生きるのがよいと思われる。私は人間は弱く、醜い生き物であると思う。だからこそ、人は弱者を排除し、自分の心の安定をとろうとする。社会が排除型であるからといって、自分もそうでなければならないなどと思ってはいけない。悪いことは悪い、良いことは良いと周りに流されず、自分の意見をちゃんと持っていくような生き方を

したい。

これら受講生の意見に対して、①については「排除されないように頑張る」という考え方自体を変えていく必要があること、②については自分の限界と向き合うことの重要性、③については「つながる」ことの大切さと難しさ、について解説した。

7. おわりに

本稿では、香川大学生の問題行動防止を目的として制作した動画とそれを用いた授業実践について報告し、動画に対する評価を検討してきた。「1.はじめに」において、動画制作の目的が、①身近な問題行動によって大学生活を台無しにしないよう伝える事、であり、動画を教材として用いた授業の目的が、②問題行動を起こす友人との関係を考える必要性を伝える事、だと述べた。①に関しては、動画視聴後に実施したアンケート調査の結果において、概して問題行動について理解している学生が多いことが明らかになっており、目的をある程度達成できたと考えられる。一方、②に関しては、授業で扱うことができたのは確かだが、その効果は測定できていない。一度の授業で扱うには、奥深いテーマではあるものの、効果検証の方法も含めて引き続き検討を続けていきたい。

なお、本稿を執筆することでみえてきた課題がある。最後にその点について触れておこう。動画視聴後に実施したアンケート調査では、いずれの項目においても概して肯定的な回答が得られた。しかし、その中で唯一肯定的な回答が9割に達していない項目がある。「動画で起きたようなことが自分の身に起きる可能性もあると思った」の77%である。

この項目は、動画視聴を通して、学生に自分の問題として問題行動について考えてほしいと思い、設定した。約8割が肯定的な回答を示しているので、動画制作にあたってのその目的はある程度達成されたといえる。他方、調査結果の解釈にあたっては、肯定的な回答をしていない約2割の学生についてもネガティブに捉えるべきではないと考えている。

動画で起きた内容が自分の身に起きる可能性がない、と考えるのは自分の行動に対する絶対的な自信である。自分は問題行動を起こさない。だから、問題行動を起こす人が理解できない。となるのは意図するところではないが、「自分は問題行動を起こさない」という立場から社会の在り方を考えていくことができれば、それで十分ではないかと考える。動画を用いた授業実践は、問題行動を起こさない人物がいかに友人を援助するか、という視点から構成されている。動画制作の目的を二つ設定することによって生じた矛盾をどのように整えていくかが、筆者らに与えられた今後の課題である。

謝辞

本調査にご協力いただいた皆さん、動画制作にご協力くださった香西監督をはじめとするスタッフの皆様に心より御礼申し上げます。

注

- 1) 全学共通教育カリキュラム改編が行われた当時の大学教育開発センター長である武重は、新しいカリキュラムの中にシティズンシップ教育を入れるべきだという考えがあったと述べている（武重ほか、2016）。
- 2) これまでに万引き防止動画の制作経験のある大久保に対して、当時の教育担当理事から動画制作の依頼があった。その後、主題 A を担当している西本に対して、大久保から協力依頼があり、動画が制作された。
- 3) 本動画は、香川大学 youtube チャンネルに掲載されている。「香川大学物語（不祥事防止啓発動画）」<https://www.youtube.com/watch?v=9QgJElbkkK0&list=PLU1xE02-olHRIfURui1rw07TJFJoLQZp1&index=2>
- 4) 動画制作の脚本・監督・編集については、香西志帆監督とスタッフの皆様の協力を得た。香西監督は、百十四銀行営業統括部に所属しながら瀬戸内国際芸術祭のオープニング映像の制作を手掛けられる等、高度な専門的知識と技術を有しておられる。

参考文献

- 藤本佳奈（2015）「市民としての倫理教育に関する授業モデルの開発」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 12 号、105-116 頁。
- 松下良平（2011）『道徳教育はホントに道徳的か？』日本図書センター。
- 大久保智生（2011）「現代の子どもや若者は社会性が欠如しているのか：コミュニケーション能力と規範意識の低下言説からみる社会」大久保智生・牧郁子編『実践をふりかえるための教育心理学：教育心理学にまつわる言説を疑う』ナカニシヤ出版、113-128 頁。
- 大久保智生・西本佳代（2016）「香川大学 1 年生の問題行動の実態」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 13 号、41-53 頁。
- 大久保智生・時岡晴美・有馬道久・松浦隆夫・高橋護（2012）「万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの参画による青少年の意識変化について（その 2）—動画の視聴者の評価と参画した大学生の中学生の意識調査から—」『香川大学教育実践総合研究』第 25 号、57-68 頁。
- 武重雅文・西本佳代（2016）「香川大学全学共通教育の歩み—武重雅文教授の語りから—」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 13 号、27-39 頁。
- 武重雅文・田中健二・櫻井佳樹・葛城浩一・佐藤慶太・最上英明・岩中貴裕・石川雄一・中村邦彦（2011）「全学共通教育新カリキュラムについて」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 11 号、1-13 頁。
- 時岡晴美・岡田涼・大久保智生（2013）「主題 A 「人生とキャリア」における「市民としての責任感と倫理観」の授業実践—「人生選択の社会学」の授業における万引き防止教育プログラムの実践と評価—」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 10 号、91-100 頁。